

首都圏出身移住者の京阪式語形・アクセントの受容実態

— 2, 3 拍動詞否定形に焦点を当てて —

余 健

The Incorporation of the Keihan Dialectal Forms and Accent Patterns by the People from the Tokyo Area — on the Negative Forms of the Verbs with 2 and 3 Moras —

Ken YEO

キーワード

対応置換、中間地域語体系、過剰般化、使用意識、在阪期間

1. 本研究の目的

以下で取り上げる本研究が基づいた移住者の方言（以下地域語）受容研究から、わかるように、これまでの先行研究は、語彙なら、語彙項目、アクセントならアクセント項目に焦点を絞った研究が、大部分かと思われる。それらの文献を目にしながら、筆者は「語彙をこのように受容している人は、アクセントにおいては、どのような受容傾向を見せているのだろうか」という素朴な疑問を抱くことが、多かった。つまり、ある移住者の言語受容行動における全体像を捉えてみたいと考えたのが、本研究の発端である。しかし、一口に全体像を捉えるといっても音声・文法・語彙、更には各分野の下位項目全てに焦点を当てることは、当然不可能である。つまり、本研究でいう全体像とは、一度の調査において、その結果を個別に検討する際に、互いに相殺しあわない範囲での全体像のことを指している。具体的には、京阪式の否定形（～ヘン、～ヒン）におけるアクセントと語形両者の全体像（複合受容パターン）のことである。尚、京阪式の否定形はダニエル・ロング（1990）で、関西在住の他府県出身移住者における受容度の高さ（語形における）が確認されている。

そして、この全体像を捉える上では、標準語形と東京式アクセントを有する、現在大阪在住の関東地域出身者（青年層）を対象とするのが、最適であると考えた。又、これまでの移住者のアクセント受容研究が、主に言語形成期にある子供を対象としてきたのに対し、本研究がそれを過ぎた大人（青年層）を対象とした理由は、以下のアクセント受容先行研究を概観する中で説明していく。

まず、平山（1978）では従来、無アクセント地域であった所が、有アクセント（東京式アクセント）移住者の影響を受けて、主に小中学生を中心に有アクセント地区になる可能性について、触れている。又、堀口（1980）も前出の平山と同様な調査の中で、無アクセント地域の中学生を対象にして発話だけでなく、型知覚の面でも東京式アクセント保持移住者の影響を受ける可能性について述べている。

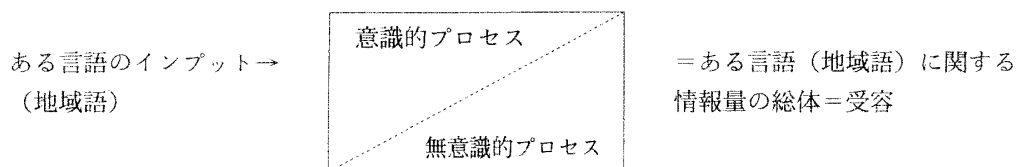
移住者のアクセント受容研究では従来、有アクセント話者が地方に移住した場合の影響につ

いて述べているものが多いが、杉藤（1980）では、大阪への移住者を対象にして京阪式アクセントの受容調査を行っている。それによれば、10歳以降の移住者の京阪式アクセント受容率は、かなり落ちることを指摘し、アクセント受容における言語形成期の重要性を説いている。又、地域別には、京阪式アクセント地域の近畿、四国、北陸の順に受容率が高く、中国、中部、関東以北の東京式アクセント地域においては、70%以上の京阪式アクセントの受容者は皆無であるとしている。

本研究の中のアクセント受容に関しては、杉藤氏が言及している「移住先アクセント体系とは特徴の異なる母地域語アクセント体系を維持する言語形成期（9歳迄）を過ぎた移住者は、その移住先アクセントを体系的に受容できない」としている点に注目したい。つまり体系的に受容できないということは、すなわち体系的な非規範形式（ある種の間地域語体系）が、言語形成期を過ぎた大人（青年層）に確認され得る可能性を示唆するものであろう。本研究の中のアクセント受容に関しては、この視点に立ち、Corder（1974）等による誤用分析の手法を参考にしながら、杉藤氏では、触れられていない言語形成期を過ぎた大人（青年層）の受容実態を確認したい。そして確認された内的な京阪式の語形・アクセントの受容傾向が、外的な要因である被調査者の在阪期間・使用意識とどのような相関関係にあるのか、まず個別に検討する。次いでアクセント・語形レベルにおける全体像を上記の外的な要因との絡みの中で捉えたい。

2. 『受容』の定義

本章では『習得』や『学習』といった主に第2言語習得研究で使われている用語と関連づけながら、本研究で取り扱う『受容』について定義する。Krashen（1981）によれば「習得はある言語のインプットに対する半意識的な獲得プロセスであり、学習は意識的な獲得プロセスである」としている。これに対して、Chambers（1992）は「意識的なプロセスと無意識的なプロセスとの区別は、曖昧である」とし、Ellis（1994）も「両者を区別する意義は、見当たらない」としている。ここでChambers（1992）とEllis（1994）に基づいて考えてみると意識的プロセスと無意識的プロセスは、図1のような『連続体』を成しているものとするべきものと考えられる。そこで本研究で扱う受容とは、『この連続体の中で受け入れられたある言語（地域語）についての情報量の総体』を表すものとする。



※尚上記の定義づけは、あくまで被調査者の『受容』態度についてのものであり、調査者側の態度としては被調査者に上記の『連続体から成るプロセス』について、できる限り意識化させて聞いている。

（図1）受容の定義

3. 調査結果

3-1. 調査時期・調査地点

調査は、1996年7月から8月にかけて、大阪大学で実施した。

3-2. インフォーマントの属性

調査対象者は言語形成期間の大部分（5～15歳までの間の10年以上）を関東地方1都4県（東京都、埼玉県、神奈川県、千葉県、群馬県）で過ごした計18名で、そのうち条件に合わなかった6名を除いた12名を今回の分析対象としている（表1）。又性別は男性11名、女性1名から成り、年齢は18～29歳までの大学（院）生である。つまり今回の調査対象者としては標準語形、東京式アクセント体系を保持する言語形成期間を過ぎた青年層の内、主に男性が対象となった。又両親の成育地、東京式アクセント保持率は表1に示す通りである。尚被調査者名は、言語形成地の頭文字で表した。更に比較対照のための関西出身者3名の属性は表2に示す通りである。

（表1）首都圏出身移住者の属性

話者	性別	年齢	出身地	父親の出身地	母親の出身地	東京式アクセント度 (%)
1. S1	男	18	埼玉県	北海道	埼玉県	81
2. T1	男	19	東京都	大阪府	大阪府	86
3. C1	男	19	千葉県	兵庫県	兵庫県	63
4. S2	男	20	埼玉県	埼玉県	埼玉県	82
5. G1	男	21	群馬県	群馬県	群馬県	85
6. G2	男	21	群馬県	群馬県	群馬県	91
7. S3	女	22	埼玉県	埼玉県	東京都	90
8. S4	男	23	埼玉県	山梨県	山梨県	76
9. C2	男	24	千葉県	岡山県	東京都	82
10. T2	男	28	東京都	東京都	東京都	95
11. K1	男	29	神奈川県	東京都	東京都	95
12. K2	男	21	神奈川県	神奈川県	神奈川県	81

（表2）関西出身者の属性

話者	性別	年齢	出身地	父親の出身地	母親の出身地	京阪式アクセント度 (%)
1. O1	男	21	大阪府	香川県	奈良県	81
2. K1	女	21	京都府	長崎県	長崎県	86
3. O2	女	30代	大阪府	大阪府	大阪府	95

3-3. 調査項目・調査方法

3-3-1. 読む調査

東京式アクセントの保有状況を確認するために、2拍名詞の同音意義語6語を語単独と「～ガ」を下接した場合、計2回ずつ読み上げてもらった。又2、3拍動詞各4語、2拍動詞否定形4語（判定時省略）、4拍動詞2語についても語単独の形で2回ずつ読んでもらった。

次に、2、3拍動詞、語幹末1音節動詞の否定表現（単純否定形と不可能形）について文形式で尋ね、京阪式の語形とアクセント両面の受容状況を確認した。京阪式の否定形のアクセントについては、真田（1993, 2000）で提唱された対応置換に基づき今回は、2拍動詞、3拍動

詞（未然形が2拍のもの）の第1, 2類のみに焦点を当てて報告する。更に、回答された京阪式の語形とアクセントについて、母地域語での使用の有無を確認するために、多少の間隔を開けて、同様の文章を東京式アクセントで読み上げてもらっている。又、比較対照のために、京阪出身者3名にも同様な調査を行った。

3-3-2. 調査法

第1回答時は自由回答形式で2度ずつ調査文を読み上げてもらい、語形とアクセント（～ヘン、～ヒン回答語のみ対象）両面における受容状況を確認した。更に～ヘン、～ヒン接続時のアクセントを確認するために、第1回答時に～ヘン、～ヒンで回答されなかったものには第2回答時に～ヘン、～ヒンを提示し、被調査者にどちらかを選択させ回答してもらった。つまり語形の受容状況を分析する際は第1回答のみを対象とし、アクセントの受容状況を確認する際は第1, 第2の両回答を対象としている。

又第1, 第2両回答共に標準語翻訳式で尋ね、始めに「親しい関西の友人に話しかけるつもりで、できるだけ関西の言葉に変えて言ってください。特に下線部に関しては語形も音の調子も変えて言ってください」と教示している。

3-3-3. 使用意識調査

使用意識については否定表現項目の第1回答終了時に、下欄の要領で尋ねていて1（使用意識が高い）、2（やや高い）、3（やや低い）、4（使用意識無し）の4段階から選択してもらった。

（質問項目）今、答えて頂いたような京阪の言葉を普段、あなたは実際にどの程度使っていると思いますか。

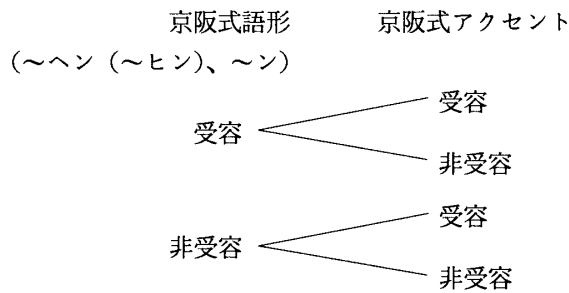
1	2	3	4	
使っている	<div style="position: absolute; top: -5px; left: 0; right: 0; border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; height: 10px;"></div>			使っていない

その他に否定項目（～ヘン、～ヒン）における語形の組合わせとアクセント核の位置の違いによる許容度について尋ねた許容度意識調査、大阪の言葉や土地に対する好悪等の言語意識調査、性向テスト（Y-Gテスト）も実施したが、本稿では、上記の調査項目の中の読む調査（3-3-1）と使用意識調査（3-3-3）の項目のみを取り上げて報告する。

3-4. 仮説

否定項目における京阪式語形、京阪式アクセント両者の受容時において理論上想定できる受容・非受容パターンは、図2に示すような4通りである。

以下では京阪式語形、アクセントの両受容実態を個別に確認し、最終的に各インフォーマントが、4パターン中（図2）のどの受容パターンに振り分けられるのかを確認する（4節）。



(図2) 京阪式否定語形・アクセントの複合受容パターン

4. 結果と考察

4-1. 否定形における京阪式語形と京阪式アクセントの受容実態について

否定形における京阪式語形の受容実態（第1回答時のみ）と京阪式アクセント（第1, 第2両回答時）の受容実態は、表3~表5に示す通りである。尚表3は、2拍動詞第1類（8語）について、表4は2拍動詞第2類（10語）について示してある。京阪式アクセントの受容実態（規範型率）については表5に提示してある。

又両実態とも、外的要因である被調査者の在阪期間と使用意識別に示した。在阪期間は短期間（4ヶ月）~長期間（5年4ヶ月）の順に、使用意識は3段階の「やや高い, 低い, 無し」別に示してある。尚今回の被調査者の中には、最も使用意識の高い1段階（非常に高い）の回答は、見当たらなかった。ここでは、両実態について概観する。まず否定形における京阪式語形の受容実態については表3, 表4から、回答語形として京阪式語形の「~ヘン（ヒン）」形と「~ン」形、標準語形の「~ナイ形」が確認される。尚4-2節で、京阪式否定語形の受容実態と外的な要因である在阪期間、使用意識との関係を検討する。

次に、否定形における京阪式アクセントの受容実態については表5から、第1, 2類共に比較的高い京阪式アクセント規範率を示している1名（No.1）と、第1類のみ高い規範率を示している1名（No.2）を除いて、以下の2群に大別される。1群目は第2類のみに高い規範率

(表3) 京阪式否定形受容語形（第1回答時）- 2, 3拍動詞第1類-

話者名	在阪期間	使用意識	言わない	言えない	行かない	行けない	泣かない	止めない	負けない	借りない
1. S1	4ヶ月	やや高い	イワン	イエン	イカン	イケヘン	ナカヘン	ヤメナイ	マケン	カリン
2. T1	4ヶ月	やや低い	イーヘン	イエヘン	イカヘン	イケヘン	ナカヘン	ヤメヘン	マケヘン	カリヘン
3. S2	4ヶ月	やや低い	イワヘン	イエヘン	イカヘン	イケナイ	ナカヘン	ヤメナイ	マケン	カリン
4. K1	4ヶ月	やや低い	イワヘン	イエヘン	イカヘン	イケヘン	ナカヘン	ヤメヘン	マケヘン	カリヘン
5. C1	1年4ヶ月	やや高い	イワナイ	イエヘン	イカヘン	イケナイ	ナカヘン	ヤメナイ	マケナイ	カリナイ
6. G1	1年4ヶ月	やや低い	イワナイ	イエヘン	イカヘン	イケヘン	ナカナイ	ヤメナイ	マケヘン	カリナイ
7. S3	1年4ヶ月	無し	イワナイ	イエナイ	イカナイ	イケナイ	ナカナイ	ヤメナイ	マケナイ	カリナイ
8. K2	1年4ヶ月	無し	イエヘン	イエヘン	イカヘン	イケヘン	ナカヘン	ヤメヘン	マケヘン	カリヘン
9. G2	2年4ヶ月	やや高い	イワヘン	ユエヘン	イカヘン	イケヘン	ナカヘン	ヤメヘン	マケヘン	カリヒン
10. S4	3年4ヶ月	無し	イワヘン	イエヘン	イカヘン	イケヘン	ナカン	ヤメン	マケン	カリヒン
11. C2	5年4ヶ月	やや高い	ユワヘン	ユエヘン	イカヘン	イカレヘン	ナカヘン	ヤメヘン	マケヘン	カリヘン
12. T2	5年4ヶ月	無し	ユワヘン	イエヘン	イカヘン	イケン	ナカン	ヤメナイ	マケン	カリヘン

(表4) 京阪式否定形受容語形(第1回答時) - 2, 3拍動詞第2類 -

話者名	在阪期間	使用意識	合わない	取らない	飲まない	飲めない	掛けない	受けない	詫びない	起きない	生きない	住めない
1. S1	4ヶ月	やや高い	アワン	トラヘン	ノマン	ノメン	カケン	ウケン	ワビン	オキヘン	イキヘン	スメヘン
2. T1	4ヶ月	やや低い	アワヘン	トラヘン	ノマヘン	ノメヘン	カケヘン	ウケヘン	ワビヘン	オキヘン	イキヘン	スメヘン
3. S2	4ヶ月	やや低い	アワヘン	トラン	ノメヘン	ノメヘン	カケナイ	ウケナイ	ワビン	オキン	イキナイ	スメナイ
4. K1	4ヶ月	やや低い	アワヘン	トラヘン	ノマヘン	ノメヘン	カケヘン	ウケヘン	ワビナイ	オキヘン	イキナイ	スメヘン
5. C1	1年4ヶ月	やや高い	アワナイ	トラナイ	ノマナイ	ノメナイ	カケナイ	ウケン	ワビナイ	オキナイ	イキナイ	スメヘン
6. G1	1年4ヶ月	やや低い	アワヘン	トラナイ	ノマナイ	ノメナイ	カケナイ	ウケヘン	ワビナイ	オキナイ	イキナイ	スメナイ
7. S3	1年4ヶ月	無し	アワナイ	トラナイ	ノマナイ	ノメナイ	カケナイ	ウケナイ	ワビナイ	オキナイ	イキナイ	スメナイ
8. K2	1年4ヶ月	無し	アワヘン	トラヘン	ノマヘン	ノメヘン	カケヘン	ウケヘン	ワビヘン	オキヘン	イキヘン	スメヘン
9. G2	2年4ヶ月	やや高い	アワヘン	トラヘン	ノマヘン	ノメヘン	カケヘン	ウケヘン	ワビヘン	オキヘン	イキヘン	スメヘン
10. S4	3年4ヶ月	無し	アワヘン	トラン	ノマヘン	ノメヘン	カケヘン	ウケン	ワビヘン	オキヘン	イキヘン	スメヘン
11. C2	5年4ヶ月	やや高い	アワヘン	トラヘン	ノマヘン	ノメヘン	カケヘン	ウケヘン	ワビヘン	オキヘン	イキヘン	スメヘン
12. T2	5年4ヶ月	無し	アワヘン	トラン	ノマン	ノメン	カケン	ウケヘン	ワビン	オキン	イキヘン	スメン

(表5) ~ヘン(ヒン)接続時の回答に占める京阪式アクセントの規範型率

話者名	在阪期間	使用意識	2, 3拍動詞第1類		2, 3拍動詞第2類	
1. C1	1年4ヶ月	やや高い	64.3%	9/14	90.0%	18/20
2. K1	4ヶ月	やや低い	68.8%	11/16	0.0%	0/20
3. S1	4ヶ月	やや高い	12.5%	2/16	80.0%	16/20
4. T1	4ヶ月	やや低い	25.0%	4/16	100.0%	20/20
5. G2	2年4ヶ月	やや高い	12.5%	2/16	88.9%	16/18
6. S4	3年4ヶ月	無し	0.0%	0/16	94.4%	17/18
7. T2	5年4ヶ月	無し	12.5%	2/16	85.0%	17/20
8. S2	4ヶ月	やや低い	31.3%	5/16	35.0%	7/20
9. S3	1年4ヶ月	無し	0.0%	0/16	5.0%	1/20
10. K2	1年4ヶ月	無し	6.3%	1/16	11.1%	2/18
11. G1	1年4ヶ月	やや低い	0.0%	0/16	20.0%	4/20
12. C2	5年4ヶ月	やや高い	42.9%	6/14	35.0%	7/20
		平均	23.0%	3.5	53.7%	10.4

を示している群(No.3~7)であり、2群目は、第1, 2類共に低い規範率を示している群(No.8~12)である。ここで言う規範率とは、あくまで関西中央部を中心に多く使用されている京阪式アクセントの核の位置のことであり、京阪式アクセントのもう一つの重要な特徴で、東京式アクセントにはない式(高起式・低起式)の特徴については、本稿では考察の対象外とする。

第1, 2類共に比較的高い京阪式アクセント規範率を示している(1, C1)以外の被調査者における数値の偏りには、系統的な中間地域語体系の存在が予想され、実際に4-3-1節で触れるように、3種の中間地域語パターンが確認された。この中間体系が生まれた経緯と外的な要因である在阪期間、使用意識との関係については4-3-2節で検討し、最終的には5節で京阪式語形・アクセント両受容実態における複合受容パターンについて言及する。

4-2. 京阪式否定語形の受容実態(第1回答時)

関東出身者における京阪式否定語形の受容実態は、表6に示す通りである。尚ここでは前提条件として、関西出身者3名(表2参照)においての第1回答語形がすべての項目で、100%、

(表6) ~ヘン(ヒン) 接続時の回答に占める京阪式・標準式語形の規範型率

話者名	在阪期間	使用意識	京 阪 式 語 形				標 準 語 形	
			~ヘン(ヒン)		~ン		~ナイ	
1. T1	4ヶ月	やや低い	100.0%	18/18	0.0%	0/18	0.0%	0/18
2. K2	1年4ヶ月	無し	100.0%	18/18	0.0%	0/18	0.0%	0/18
3. G2	2年4ヶ月	やや高い	100.0%	18/18	0.0%	0/18	0.0%	0/18
4. C2	5年4ヶ月	やや高い	100.0%	18/18	0.0%	0/18	0.0%	0/18
5. K1	4ヶ月	やや低い	88.9%	16/18	0.0%	0/18	11.1%	2/18
6. S4	3年4ヶ月	無し	72.2%	13/18	0.0%	0/18	27.8%	5/18
7. T2	5年4ヶ月	無し	38.9%	7/18	55.6%	10/18	5.6%	1/18
8. S2	4ヶ月	やや低い	38.9%	7/18	27.8%	5/18	33.3%	6/18
9. S1	4ヶ月	やや高い	33.3%	6/18	61.1%	11/18	5.6%	1/18
10. G1	1年4ヶ月	やや低い	33.3%	6/18	0.0%	0/18	66.6%	12/18
11. C1	1年4ヶ月	やや高い	22.2%	4/18	5.6%	1/18	72.2%	13/18
12. S3	1年4ヶ月	無し	0.0%	0/18	0.0%	0/18	100.0%	18/18
		平均	60.6%	11.0	12.5%	2.3	26.9%	4.8

「~ヘン(ヒン)」接続であったことを押さえておく。

表6は、関東出身者の京阪式否定語形(「~ヘン(ヒン)」)における回答率の高い順に並べられていて、その回答率の高い群(被調査者No.1~6)とその回答率の低い群(被調査者No.7~12)の2群に、大別される。

ここで、外的な要因である在阪期間と対応させてみると、「~ヘン(ヒン)」の高回答率群(No.1~6)と低回答率群(No.7~12)の両群において、最短の4ヶ月から、中間段階の1年4ヶ月・2年4ヶ月、更には、最長の5年4ヶ月までおり、在阪期間との有意な相関は、見当たらない。つまり在阪期間が、長くなるほど「~ヘン(ヒン)」の回答率(受容率)が、高くなるといった相関関係は見出せない。

次にもう1つの外的な要因である使用意識との対応関係を確認する。まず高回答率群においては、使用意識の2段階目に相当する「やや高い」から、3段階目の「やや低い」、4段階目の「無し」までおり、使用意識との有意な差は見当たらない。つまり使用意識が高くなるほど、「~ヘン(ヒン)」の回答率(受容率)が高くなるといった相関関係は見出せないということである。次に低回答率群(被調査者No.7~12)6名においては、1名(No.9)の「やや高い」を除いて、他の5名が「低い」か「無し」の消極的な使用意識を答えている。つまり低回答率群においては、「~ヘン(ヒン)」の回答率(受容率)の低さと「使用意識の低さ」間に相関関係を見出せそうである。

以上の京阪式語形の受容実態についてまとめると以下のことが言えそうである。つまり表6における「~ヘン(ヒン)」の高回答率群、低回答率群共に在阪期間に関しては、「~ヘン(ヒン)」の回答率(受容率)との相関関係は、見当たらない。ここで在阪期間は、短いけれど「~ヘン(ヒン)」の回答率(受容率)が、高い人(T1, K1)に関して若干の考察を加えてみたい。おそらく、この人達の意識の背景には、「~ヘン(ヒン)」が、京阪式地域語の否定形のメルクマールとして頭の中であり、「普段、あまり使っていないけれど、否定形にはとにかく、母地域語である「~ナイ」を移住先の地域語である「~ヘン(ヒン)」に変換しておけばいい」といった対応置換に基づく意識が垣間見られるようである。

一方、使用意識に関しては低回答率群（No. 7～12）において、「～ヘン（ヒン）」の回答率（受容率）の低さと「使用意識の低さ」間に相関関係があるといえそうである。つまり「普段使っていないから、「～ヘン（ヒン）」も当然、受け入れていない」ということであろう。

4-3. 京阪式否定アクセントの受容実態（第1、第2両回答含む）

4-3-1. 受容実態

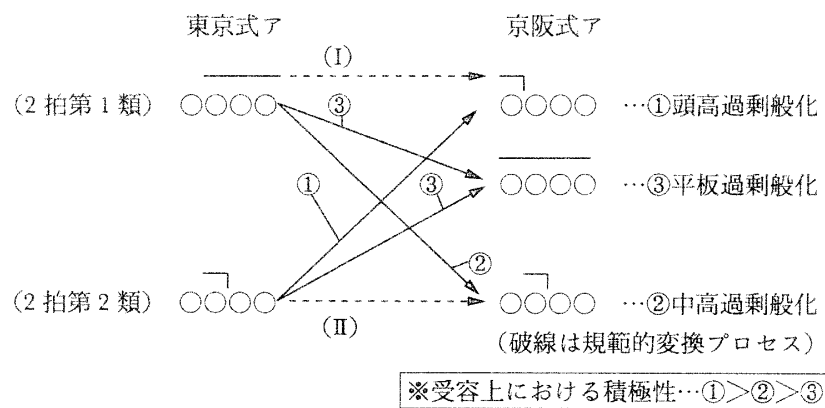
関東出身者の京阪式否定アクセントの受容実態を検討する前に、これまでの移住者のアクセント受容研究と異なる点を押さえておきたい。それは標準語翻訳式で尋ねた結果、表7に示すように京阪式語形と東京式語形において、機能（否定）と拍数（4拍）は、同じものの異なる語形について考察を進めている点である。

以下では、否定形における東京式アクセント体系と京阪式アクセント体系間の相互干渉によって生じたと思われる3種類（頭高・中高・平板）の過剰般化パターン（図3）について、規範型にも焦点を当てながら、その生成過程の考察を進め、最終的に過剰般化パターンにおける受容形式上の積極性が、①>②>③となる理由を明らかにする。

まず①頭高過剰般化パターンの生成過程について考察する。このパターンは、関東出身者の母地域語である否定形における東京式アクセント体系（以下ND）と移住先地域語である否定形における京阪式アクセント体系（以下TD）間に共通点と相違点が、共存することによって生じたものと考えられる。つまり、NDにおける2拍第2類の否定形「トラナイ」をTDの「トラヘン」に変換する際には、アクセント核の位置は共通しているため（表7）、否定接辞の「ナイ」を「ヘン」に変えるだけで十分（図3の破線Ⅱ）であるが、否定形においては移住先アクセントの京阪式にしか存在しない頭高のアクセントパターン（京阪式の2拍第1類）に引張られて、頭高に過剰般化（図3の①）するものと思われる。つまり、否定体系においては本

（表7）2拍動詞否定形（第1、2類）の規範型アクセント

	東京式アクセント	京阪式アクセント
2拍第1類動詞	行カナイ LHHH	行カヘン HLLL
2拍第2類動詞	取ラナイ LHLL	取ラヘン LHLL



（図3）過剰般化型アクセントの生成プロセス

来、NDの形式（アクセント形式）が、TDの形式（アクセント形式）も表し得るのにTDの顕在的な特徴（頭高アクセント）に引き付けられ、それを過剰に取入れようとして生じた非規範パターンといえるだろう。表8、表9では、第1、第2両回答の全回答数に占める過剰般化パターンと規範回答の割合を、頭高過剰般化群（被調査者No. 1, 2）、中高過剰般化群（No. 3～7）、平板過剰般化群（No. 9～11）、京阪式受容者（No. 12）別に示している。まず頭高過剰般化群（被調査者No. 1, 2）は、2名のみ確認され、過剰般化3群の中で最も少ないことを指摘できる。

次に、②中高過剰般化パターンについて、考察する。このパターンは、①の頭高過剰般化パターンと違って、規範的な変換過程（図3の破線I）においては、NDとTDの形式間に共通点は、存在していない。つまり拍数と機能は同じだが、アクセント核の有無も語形も違う語同

(表8)「～ヘン（ヒン）」接続時における受容アクセントの実態（第1、2両回答含む） * 2、3拍動詞第1類

話者名	在阪期間	使用意識	規 範 型		非 規 範 型					
			HLLL		LHLL		HHHH		そ の 他	
1. K1	4ヶ月	やや低い	68.8%	11/16	25.0%	4/16	6.3%	1/16	0.0%	0/16
2. C2	5年4ヶ月	やや高い	42.9%	6/14	14.3%	2/14	42.9%	6/16	0.0%	0/14
3. S4	3年4ヶ月	無 し	0.0%	0/16	100.0%	16/16	0.0%	0/16	0.0%	0/16
4. S1	4ヶ月	やや高い	12.5%	2/16	75.0%	12/16	0.0%	0/16	12.5%	2/16
5. T1	4ヶ月	やや低い	25.0%	4/16	75.0%	12/16	0.0%	0/16	0.0%	0/16
6. G2	2年4ヶ月	やや高い	12.5%	2/16	75.0%	12/16	12.5%	2/16	0.0%	0/16
7. T2	5年4ヶ月	無 し	12.5%	2/16	62.5%	10/16	18.8%	3/16	6.3%	1/16
8. S2	4ヶ月	やや低い	31.3%	5/16	37.5%	6/16	31.3%	5/16	0.0%	0/16
9. G1	1年4ヶ月	やや低い	0.0%	0/16	18.8%	3/16	81.3%	13/16	0.0%	0/16
10. S3	1年4ヶ月	無 し	0.0%	0/16	12.5%	2/16	87.5%	14/16	0.0%	0/16
11. K2	1年4ヶ月	無 し	6.3%	1/16	6.3%	1/16	87.5%	14/16	0.0%	0/16
12. C1	1年4ヶ月	やや高い	64.3%	9/14	7.1%	1/14	28.6%	4/14	0.0%	0/16
		平 均	23.0%	3.5	42.4%	5.9	33.1%	5.2	1.6%	0.3

(表9)「～ヘン（ヒン）」接続時における受容アクセントの実態（第1、2両回答含む） * 2、3拍動詞第2類

話者名	在阪期間	使用意識	規 範 型		非 規 範 型			
			LHLL		HLLL		HHHH	
1. K1	4ヶ月	やや低い	0.0%	0/20	95.0%	18/20	5.0%	1/20
2. C2	5年4ヶ月	やや高い	35.0%	7/20	40.0%	8/20	25.0%	5/20
3. S4	3年4ヶ月	無 し	94.0%	17/18	0.0%	0/18	5.6%	1/18
4. S1	4ヶ月	やや高い	80.0%	16/20	20.0%	4/20	0.0%	0/20
5. T1	4ヶ月	やや低い	100.0%	20/20	0.0%	0/20	0.0%	0/20
6. G2	2年4ヶ月	やや高い	88.9%	16/18	0.0%	0/18	11.1%	2/18
7. T2	5年4ヶ月	無 し	85.0%	17/20	0.0%	0/20	15.0%	3/20
8. S2	4ヶ月	やや低い	35.0%	7/20	10.0%	2/20	55.0%	11/20
9. G1	1年4ヶ月	やや低い	20.0%	4/20	0.0%	0/20	80.0%	16/20
10. S3	1年4ヶ月	無 し	5.0%	1/20	0.0%	0/20	95.0%	15/20
11. K2	1年4ヶ月	無 し	11.1%	2/18	5.6%	1/18	83.3%	15/18
12. C1	1年4ヶ月	やや高い	90.0%	18/20	10.0%	2/20	0.0%	0/20
		平 均	53.7%	10.4	15.1%	4.6	31.3%	5.8

士における変換過程を検討する。この中高過剰般化パターンに関しては関東出身者にとって、語類は異なるが、NDにもTDにも共通して存在（2拍第2類）しており、アクセント核の位置だけで考慮してみると、3種の過剰般化パターンの中では、取入れやすいパターンの1つと言えそうである（表8, 9）。この場合の過剰般化のプロセスについては、2つの解釈が可能であろう。1つ目の解釈は、NDのアクセント型をTDのアクセント型に「転移」させた取る解釈、正確に言えば、NDの第2類のアクセント型をTDの第2類のアクセント型に転移（正の転移、図3の破線II）させ、その後、TDの第1類の語に、過剰般化させた取る解釈である（図3）。もう1つの解釈として、否定形における京阪式アクセントのメルクマールである頭高アクセントを「回避」した結果とも、取れるだろう。実態として、どちらかの解釈が妥当なのか、それとも両方の解釈が重なっているのかという問題は、被調査者にこの点の意識を尋ねていないので現段階では、明確なことは述べられない。

更に③平板過剰般化パターンについて、検討する。まず、ここで指摘する平板型とは、東京式の1拍目と2拍目の高さが異なるLHHHではなく、全高のHHHHである。この点に関しては、たとえば、京阪式アクセントの式（高起式）の特徴を受容した結果としても、やはり、平板型は動詞否定形における京阪式アクセントの規範には、存在しておらず、以下に示すような考え方をとって、差し支えないかと思われる。すなわちこのパターンの場合はNDの体系には存在するが、そもそもTDには存在していない形式で、かなり純粋にNDからの転移といえよう。

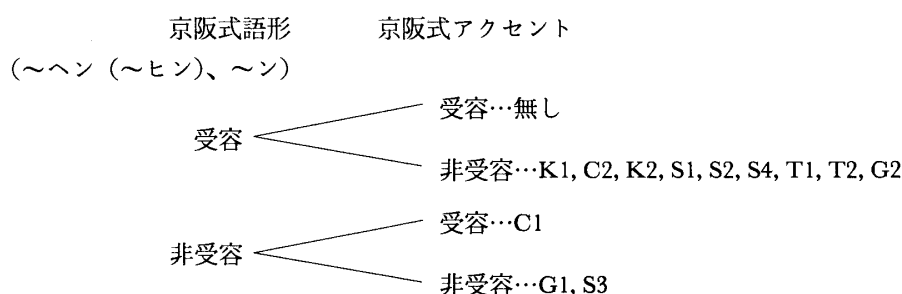
最終的に、①の頭高過剰般化の基準型である頭高型は、TD（移住先の京阪式アクセント）にしか存在しておらず、②の中高過剰般化の基準型である中高型は、TD、ND（母地域語の東京式アクセント）に共存しており、③の平板過剰般化の基準型である平板型は、NDにしか存在していない。以上の点から3種の過剰般化パターンにおいて形式上①>②>③の順に、積極的な受容パターンであるといえそうである（図3）。

4-3-2. 過剰般化パターンと使用意識・在阪期間との関係

前節で、確認された積極性の順による過剰般化パターンに使用意識が、どの程度対応しているか以下で確認する。表8, 9より、①の頭高過剰般化群（No. 1, 2）、②の中高過剰般化群（No. 3~7）共に、明確な使用意識・在阪期間との相関関係は見当たらない。しかし③の平板過剰般化群（No. 8~No. 11）においては、消極的な使用意識（やや低いか無し）、在阪期間の短さ（1年4ヶ月未満）と相関関係にありそうである。つまり、「京阪式の2, 3拍動詞の否定形アクセントを平板型で過剰般化する人達は、京阪式の否定形をあまり使っていないかもしくは、全く使っていない意識を持ち、又比較的在阪期間の短い人に多い」といえそうである。

5. 京阪式語形、京阪式アクセントの複合受容パターン（結論）

京阪式語形・アクセントの複合受容パターンは、図4に示す通りである。語形もアクセントも規範的に受容している人は、今回の調査においては見当たらなかった。尚ここで述べる受容・非受容とはあくまで、相対的な基準に基づいている。最も多かった複合受容パターンは、京阪式の語形は受容している（相対的に受容率が高い）けれど、京阪式アクセントは、規範上受容していない（過剰般化受容）パターンである。尚、その過剰般化パターンには、①頭高過剰般化（K1, C2）、②中高過剰般化（S4, S1, T1, G2, T2）、③平板過剰般化（G1, S3, K2）



(図4) 京阪式否定語形・アクセントの複合受容パターンにおける実態

の3パターンが確認され、又移住先アクセントの受容上①>②>③順に積極的なパターンであることも確認された(4-3-1節、表8, 9)。杉藤(1980)等で主張されている規範的なアクセント受容における従来の言語形成期の重要性を支持しつつも、言語形成期を過ぎた青年層(東京式アクセント保持者)のアクセント受容における実態について限られた範囲においてあるが、ある程度、明らかにできたのではないだろうか。

又C1は、京阪式アクセント受容においては、唯一、第1, 2類共に規範率が高いが、京阪式の語形の受容率(第1回答時)は、かなり低く、標準語形回答率が7割近くを占めている(表6)。

更に、京阪式の語形もアクセントも受容していないG1とS3(表5, 6)は、最も受容度が低い群といえ、特にS3は語形の受容においても100%標準語形で回答しており、今回の被調査者の中でも、最も受容度の低い人といえそうである。

又語形、アクセントレベルにおける全体像と外的な要因との関係において、一貫して、相関が見られたのは、G1, S2, S3の3名においてのみであった。つまり、この3名の語形の回答傾向においては、大阪で優勢とされる「～ヘン(ヒン)」形の回答率が低く(表6)、受容アクセントにおいても、最も消極的な平板過剰傾向を示している(表8, 9)。そして、この内的な両者の傾向に対する外的な要因としては、使用意識の消極さと在阪期間の短さ(1年4ヶ月以内)を挙げられる。

◇質問項目一覧

—2拍動詞第1類(8語)—

- (h-1) そんなおかしいこと、私は、言わない。
- (h-2) この週末は、どこも行かない。
- (h-3) 人前では、泣かない。
- (f-4) 一度、物事を始めたら最後まで止めない。
- (h-5) あいつにだけは、絶対に負けない。
- (h-6) 人から、お金は借りない。
- (f-7) そんな失礼なことは、言えない。
- (f-8) 来週は、忙しいからどこにも行けない。

－2 拍動詞第2類（10語）－

- (h-1) あの人は、性格的に合わない。
- (h-2) 単位は、もう充分だから、今年は何も取らない。
- (h-3) 今日は、たくさん飲んだから、もう飲まない。
- (h-4) そんな汚い所に服を掛けない。
- (h-5) そんな非常識な頼みごとは、受けない。
- (h-6) 信念でやったことだから、詫びない。
- (h-7) 朝4時集合なんていっても、誰も起きない。
- (h-8) 蝉って一週間位しか、生きない。
- (f-9) こんな汚い水は、飲めない。
- (f-10) ここは、騒がしくて住めない。

引用・参考文献

- 飯豊毅一他（1984）講座方言学 5 関東地方の方言
 上野善道（1989）「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育学2』 明治書院
 大橋勝男（1988）『関東地方域の方言についての方言地理学的研究 第1巻』 桜楓社
 神鳥武彦（1996）「他地方の方言語詞に対する認知度・使用度」『現代社会と方言』 明治書院
 郡史郎・杉藤美代子（1989）「大阪アクセントの世代差」『音声言語Ⅲ』
 杉藤美代子、田原広史（1989）「統計的観点から見た大阪アクセント－東京との比較を中心に」『音声言語Ⅲ』
 杉藤美代子（1980）『大都市の言語生活－分析編－』国立国語研究所報告70-1 三省堂
 真田信治（1988）「関西中央部の若年層における言語使用の動向」『関西方言の動態に関する社会言語学的研究』
 真田信治（1993）「対応変換－関西アクセントを事例にして－」『国際化する日本語話し言葉の科学と音声教育』
 真田信治（2000）『脱・標準語の時代』小学館文庫
 真田信治（2001）『関西・ことばの動態』大阪大学出版会
 柴田武他（1985）「東京語アクセント資料上・下巻」国立国語研究所言語変化第一研究室
 ダニエル・ロング（1990）「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」『国語学162』
 平山輝男（1978）「移住者2世の言語－特に無アクセント地域の場合」『国語学』114
 日高水穂（1994）「近畿地方の動詞の否定形」『方言文法1』GAJ研究会
 堀口純子（1980）「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント」『文芸言語研究 言語編』5、7
 宮治弘明（1995）「大阪市の若年層における方言の動態」『梅花女子大学紀要国語・国文学』29
 山本俊治（1981）「「ン」・「ヘン」をめぐって」－大阪方言における否定法－『方言学論叢Ⅰ 方言研究の推進』三省堂
 和田実（1959）「関西アクセントの印象」『音声学会報』99
 Corder, S.P., (1974) "The Significance of Learners' Errors" IRAL5, 1967. Reprinted in Richards
 J.K. Chambers (1992) 「Dialect acquisition」『Language 68』
 Rod Ellis/牧野高吉訳（1988）『第2言語習得の基礎』蒼洋出版
 Rod Ellis (1994) 「Second Language Aquisition」Oxford University Press

【付記】1996年当時、ご指導いただきました真田信治先生（大阪大学大学院）、日高水穂氏（現秋田大学）、そして根気強くご協力いただいた話者のみなさんに心よりお礼申し上げます。